



神話のなかの女たち

日本社会と女性性

横山 博



人文書院

著者略歴

横山 博（よこやま・ひろし）

1945年石川県生まれ。

1970年京都大学医学部卒業，精神医学を専攻。

精神病院勤務のかたわらユング心理学を研究。

1983-1984年，1988-1989年の二回にわたって

チューリッヒ・ユング研究所へ留学。1989年

7月，ユング派分析家の資格を取得。以後，

病院勤務をつづけながら横山分析心理研究所

を開設。1995年4月より甲南大学文学部教授。

主要論文は「元型イメージの治癒力と危険」

（『季刊 精神療法 17-3』金剛出版，1991）。

しんわ
神話のなかの女たち

おんな
日本社会と女性性

一九九五年 三月二五日 初版第一刷印刷
一九九五年 四月一日 初版第一刷発行

著 者 横山 博

発 行 者 渡辺陸久

発 行 所 人文書院

京都市伏見区竹田真幡木町三九の五
電話〇七五（六〇三）一三四四
振替京都〇一一〇三

印刷 創栄図書印刷株式会社
製本 坂井製本所

©Hiroshi YOKOYAMA, 1995.
Printed in Japan.
ISBN4-409-34013-1 C0011

〔R〕〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3269-5784）にご連絡ください。

まえがき

今日、日本では、カウンセリングや精神分析を求める女性たちが、次第に、そして確実に増加してきているように思われる。筆者は二つの精神科病院の外来部門で働いており、そこにはヒステリーに典型的な喉の異常感、鬱状態、不安、さまざまな身体化障害（心の問題が身体の症状として現われる）、そして精神分裂病に代表される精神病など広い範囲の症状を病む女性が訪れる。ある人は薬物療法や簡単な精神療法で軽快にいたるが、大半は、症状から解放されるには、彼女たちの意識的態度を多少なりとも変える必要がある、心の深い部分の探索を必要とせざるを得ない。

たとえば青年期にある少女たちは「自我同一性と身体性に根づいた女性性をどう統合するか」の葛藤に苦しめられている。また新しく母となった娘たちは、母としての養育の仕事と自分自身の女性としての生き方のずれに病むかもしれない。さらには五十歳を過ぎた女性たちは、老いの問題や人生後

半の生き甲斐について病むであろう。これらの症状の背後には、単なる個人の問題に還元することのできない、「いま、この日本の現代社会で、個なる女性としてどう生きるか」という、すぐれて文化的、時代的な基本的諸問題が横たわっているように思われる。

フェミニズムを中心とした論壇では先鋭的な問題が論議されているが、臨床という場でこれを見るとき、問題はより重層化し、複雑となる。そして、いまなお病む女性たちは、みずからの個人的な問題を解決するために、「日本の伝統的なものの見方と西欧的自我のあり方のずれ」という古くて新しい問題に直面せざるを得ない、というのが筆者の臨床から受ける印象である。

戦前のわが国においては、周知のように、強い家族制度が存在し、家督の世襲制と家族の富を守ることがもつとも基本的な目的であった。その家族制度は、表面的には父権制のかたちをとりつつ、背後では女性が、システム維持のために重要な役割を果たしていた。すなわち、彼女がその家を世襲する長男を産むのであり、外の仕事に携わる夫を支え、家事一般はおもに姑―嫁の流れのなかで受け継がれてきたのである。このなかで、彼女の生き方は、母、嫁としての家族の実質的支持者の役割に限られ、数少ない例外を除いて、ほとんどの戦前のわが国の女性にとって、「個」をもった女性として生きてゆくことは、著しく困難であったといえよう。

第二次世界大戦での日本の敗北は、その家族システムを、家族成員どうしの関係性重視のあり方から、個々人を重視するあり方へと大きく変えた。この家族システムを含む社会状況の変化は、女性の生き方に大きな変化をもたらし、いまもその混乱は収まっていない。このなかで多くの女性たちは、西欧的なあり方をモデルとして採用し、みずからの生き方を変えようと試みた。しかし、はたして彼

女たちは、わが国の伝統的なものから、西欧的でより個性的な生き方へと変えることができたのであるか。

答えははまだ明確とはいいたくない。この仕事がそう簡単にできるとは思えないし、多くの集合的な困難が、病む人たちの個人的な問題の背後に横たわっていると考えられる。本書において、個人と集合性の織りなす困難の質をすこしでも明らかにし、個々の症例の背後にある集合的レベルのパラダイムを提供できれば幸いである。

まず最初に〈女性性〉の簡単な一般的考察をしたうえで、日本神話の神代記に現われる女性像について論じてみたい。いうまでもなく、日本神話のもっとも重要な女性像はアマテラス（天照大神）である。中心的神が女性であるという日本神話のこの特質は、日本女性の〈集合的意識〉にいかに影響を及ぼしてきて、また、いまなお影響を及ぼしているのであろうか。神話とは本質的に、「ある国ないしは部族が〈集合的無意識〉つまり原初的なカオスから〈集合的意識〉を生み出す過程の表現」である。それゆえに神話は、現代の女性の心性に何らかの影響力をもっているはずで、この関係を明らかにすることを意図したい。

次に、「神話のなかの女性の質が、歴史の過程を通じて、いかような影響を受けてきたか」をみてみたい。西欧文化においてはキリスト教が、その強い父権的特質を通して、西欧人の心のあり方に多大なる影響を与えてきた。しからは日本においてはどうかであろうか。わが国は歴史上、神道のほかに、仏教や儒教などに直面してきた。これらは日本女性の心性にいかなる影響力をもっていたのであろうか。

そして最後に、臨床例を通じて「日本の現代女性がいかなる症状に苦しんでいるか」をみたうえで、それらが元型的諸問題と同時に、わが国の〈集合的意識〉にどう関係しているかを論じてみたい。

神話のなかの女たち 目次

まえがき Ⅰ

序 章 女性性の諸問題……………

第一節 女性性の神秘

第二節 父性とのかわり

第三節 母性とのかわり

第四節 アニムスとのかわり

第五節 女性の生き方をめぐって

第一部 日本神話の女神たち

はじめに

第一章 イザナミの死

第一節 日本の起源

第二節 母なる女神イザナミ

第三節 イザナミの死の意味

第四節 黄泉国のイザナミとイザナギ

第五節 イザナギの魔術的遁走

第二章 オオケツ姫の死

第三章 コノハナサクヤ姫の死

第四章 オオクニヌシを救うサシクニワカ姫

第五章	母なる女神たち	89
-----	---------	----

第六章	太陽の女神アマテラス	98
-----	------------	----

第一節	「父の娘」アマテラス
-----	------------

第二節	天岩屋戸に籠もるアマテラス
-----	---------------

第三節	アメノウズメの役割
-----	-----------

第四節	アマテラスの特質
-----	----------

第七章	スセリ姫の変容	132
-----	---------	-----

第一節	物語
-----	----

第二節	物語の意味
-----	-------

第三節	スセリ姫の特質
-----	---------

おわりに		148
------	--	-----

第二部 女性性の歴史的・現代的諸問題

第一章 歴史的観点から

第一節 古代から武家社会の確立まで

第二節 儒教の影響

第三節 仏教の影響

第四節 神道の影響

第五節 明治維新から第二次世界大戦まで

第六節 第二次世界大戦後

159

第二章 現代的諸問題

第一節 元型的レベル

第二節 伝統的な集合的意識

第三節 西欧的自我・意識との直面と葛藤

174

第三部 現代女性の葛藤と個性化

はじめに	187
------	-----

第一章 女性性を求めて	189
-------------	-----

第二章 「人魚を産む」 女性の苦悩	224
-------------------	-----

第三章 「死への花嫁」 としての少女	244
--------------------	-----

おわりに	269
------	-----

註	273
---	-----

あとがき	287
------	-----

参考文献	296
------	-----

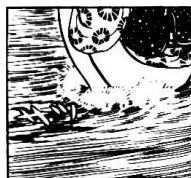
神話のなかの女たち——日本社会と女性性

序章 女性性の諸問題

第一節 女性 of 神秘

漫画家つげ義春の作品「紅い花」に、次のような場面がある。腕白な少年がいつも一人の少女にいたずらする。この少女は病気の父を看病しつつ、人里離れた山間で茶店を一人で切り盛りしている。ある日少年は、少女が谷川の岸边にしゃがんで苦しんでいるのに遭遇する。彼女は突然下腹部に痛みを感じたのである。少年は不思議に思っ⁽¹⁾て近づいて行き、彼女のしゃがむ足元から紅いスポットが点々と流れていくのを見て、深く驚き、思わず「あつ！ 紅い花だ」と叫ぶ。少女は苦しみながら「寄るな！」と少年を追い払い、彼はいつもの腕白ぶりを忘れてうろたえてしまう。この瞬間に何かが起こったのであろう。少年は少女に急に優しくなり、彼女を背負って山を降りて行く。

この漫画は一九六七年に発表され、当時非常に有名となり、数年後にはテレビでドラマ化されたり



つげ義春「紅い花」(「ガロ」1967.10. 所収)